

意識のない Ω に 囁き続ける 狂おしいほどの 告白

創作BL / オメガバース / $\alpha \times \Omega$ /
執着 / 睡かん / 監禁 / モア / スト
ーカー / 番 / ドS / 告白 / 独占欲 /
背徳感 / 濃厚エロ / 支配と服従 /
強引なアプローチ / 執着愛 / レイ○

次回：その告白は、ただの言葉じゃなかった——
支配と快楽の逃げられない夜

STORY

営業のエース・

橘は、誰もが憧れる完璧な α

でも彼は、事務部の Ω ・

深瀬陽彩を密かに“狙って”いた。

偶然出会った電車の中、

助けたあの日から——

ストーカー行為、痴漢、そして眠る

彼への“告白”と快楽の侵入。

深瀬はそれに気づかず、橘を信じ、

心を開いていく。

一方、深瀬の幼馴染みである

β ・五十住誠は、

これまでずっと深瀬の

モア(発情期)の面倒を見てきた存在。

何も知らない彼の隣で、

ゆっくりと橘の執着が牙を剥く。

——その想いは、

ただの“告白”じゃない。

それは支配であり、欲望であり、

逃げられない夜の始まりだった。

ふかせひいろ
深瀬陽彩

Ω

眠っているはずなのに、
肌を這う
ふわふわとした感触と、
耳元に濡れた音——
体は動かず、
意識は朦朧。

「これ……夢、だよね？」

そんな願いもむなしく、
甘い快樂に達してしまう。

αの告白は、
眠っている間に
始まっていた。

スーパーで夜ご飯買って夜道を歩いていると不意に誰かの気配を感じる。……。
この道は人通り少ないから……いやでも……えっもしかしてストーカー?? い
いや、そんなわけないでしょ。

どうにかマンションまでつき振り返るも追って来てはいないようだ。じゃあた
またまだったのか。一安心。だがドアを閉める時一瞬誰かの気配を感じた。ゾク
っ……。急いで鍵を閉め部屋の明かりをつける。くまなく探したが人はいないよ
うだ。

「はぁー思い込み激しいと参るな……」

夕食を食べお風呂に入り今日を終えた。

ぴちゃんぴちゃん……何か水の音が聞こえるような……。でも眠すぎて目を開
けられない。

体に触れる何かが分からない。体が動かないしこれってもしかして金縛り？

ゆっくり肌をふわふわしたものが這い、耳元ではくちゆくちゅと音がする。何が

起こっているのか……それに「はあ……はあ……」これ気持ちいい。ビクンと体が揺れ僕は射精してしまった気がする。夢であってほしいな。

朝目覚めるとちゃんと夢射していた……「最悪」

いずみまこと
五十住誠

β

挿れるたび、
前立腺を突くたびに、
陽彩の身体は勝手に
絶頂を迎えていた。
「好きだ」
けれど、その声は——
もう意識のない Ω には届かない。
誰にも渡したくない。
ただの同僚、
 β の俺はそう願うしかなかった。

「俺が α だったら——
お前の番になれたのに。」

蕾に指を入れ前立腺に指を押し込むとそれだけでも射精をしていた。あと二回くらい追い込めば……。体はグダッと力が抜けたように重くなり、限界が近いようだ。悪趣味と言われてもいい。挿入し感度が極まった体をゆっくりと抱く。ああ、気持ちいいがいい。誰にも渡したくない。俺だけの特別な Ω 。

「陽彩……好きだ」

気絶して聞こえない陽彩に俺はそう伝えた。

最近やたらと会社で会うようになった営業のエース橘。あいつは危険だ。よからぬ噂話も聞くしあまり一緒にいてほしくない。

だけど Ω の幸せはいつだって α だ。俺が α だったら陽彩の幸せも俺がずっと一生をかけて守ってやれたのに……。

寝ている陽彩の前髪をかきわけ俺は額にキスを落とした。一生目覚めなくていい。俺の傍にいてくれたらいい。陽彩……。

たちはなそうま

橘蒼馬

α

「お胎内いっぱい私
のを注いであげるから
ね。ひいろくん……」

「ひいろくん、迎えに来たよ。今
日はどんなことしようか——」

薬で眠らせ、

優しく口づけを重ねる α 。

意識のない Ω の身体を思い通りに
操り、子宮に精液を注ぐ。

「全部君は私だけのもの」

甘く囁きながら、深い独占欲と狂
おしいほどの執着を見せる。

これは愛か、

それとも支配か——。

「ひいろくん……迎えに来たよ。今日はどんなことしよっか、気持ちいいこと？ 苦しいこと？」

ひいろくんの部屋に忍び込み優しくキスをして眠り込んでしまった君に優しく口づけをする。

「今日も偉いね、ちゃんと薬飲めたんだ」

ビタミン剤として渡した薬を毎晩飲み、私に体を預けてくれる。それだけで思い通りに事が進んでいた。

「んっ……」

体には誰かとやった跡が残っていた。これは間違いない。五十住いずみ誠の仕業。

彼とひいろくんの関係はどんなものか。想像するだけで怒りがこみ上がる。

「うっ……」

「いけない、殺してしまうところだった」

首元に手を置き、絞めあげて蕾の締めつけを堪能していた。

「全部君は私だけのものだからね、大好きだよひろくん♡♡」

腰を持ちえび反りになりながらもひろくんは私を受け入れてくれている。

ああ、なんて可愛いのだろうか。もっと奥に挿入して精液を子宮に注いで孕ましてあげたい。項は君の許可が降りてから嚙んであげるからね。

グポっと子宮に入ってしまったえばハクハクと口が鯉のように開き射精ではなく潮を噴いていた。

「あーあ全部保存しておくね、君の最初の潮噴きとか精液とか全部とってあるからね」

タンタンタンと襷を擦りながら出し入れするのとグポっと子宮に入り奥まで愛すのと君はどちらが好きなのかな？

「はあ……はあ……んんあああつ」

「声出ちゃって可愛いな、お薬追加してあげる、目を覚ましたらダメだよ」

「んっ……」

水と薬を飲み込ませ意識が無くなる。

「あー胎内^{ナカ}に出したいな、私との子ども何人作ろうか、君となら五人でも十人でもいっぱい性交してあげる、あーでも子どもはいらないな。私は君だけが欲しいから」

ドクドクと放出されていくのは私の精液だ。

「お口で飲めて偉いね」

「はぁ……はぁ……」

ビクビクと痙攣し綺麗に拭いて服を着させた。

「また迎えに行くよ、ひいろくん」

まるで何事もなかったようなことを私は彼に共用している。

レ○プ α

懇親会の席、
酔ったαたちに囲まれた深瀬。

「君、可愛いね。
さっきから香りがやばいよ？」

周囲の目もあるのに、
下品な欲望は止まらない。

掘りごたつの下、
男はチャックを下ろし——

「ここで…!? や、やめ……っ」

抵抗できない身体と、笑うαたち。

この夜、助けに来たのは——

“○○”だった。

「あ、ラッキーこの間喰い損ねたΩじゃん、やっぱ君可愛いね。名前なんて言うの？」

「ふ、深瀬です……」

最悪だ。お酒の力もありαのテンションは爆上がり状態。怖すぎて震え止まらないかも。

「ねえねえ、抜けだしてホテルで喰いたいんだけど」

「お前それあからさまじゃん、深瀬くんも怖がってるし」

楽しそうに笑うαたち。

「やっぱ、いい香りすぎるわ、胎内^{ナカ}に出してえ」

「ばっか、それ孕むだろ、Ωなんだからさ」

「あ、あの！ 僕懇親会のリーダーなので抜け……抜けるとかできないし。そのここは大勢が見ている場所で……そういうのはよくないと思います」

「はっ言うじゃん。可愛い。んじゃあみんなが見ていないところだったらいいわけ？」

「へ？」

掘りごたつに男は入るとカチャカチャとチャックをおろされしなしなな性器が出た。

「ちよっ……」

「はい、静かにね。お酒飲んだ方が楽しいかもよ」

「萎^{しお}れてるの笑けるわ、まあ可愛いけど」

口に咥えて吸われているだけでもおかしくなりそうだ。それにこっちには僕しか事務部いないし周りの人らも僕らの異常な光景に気づき始め。

「おい、襖しめろ、なんか楽しそうなことしてるし」

「はい、俺とキスしてえ」

「んっ……」

「うわぁ、甘いな。もしかして俺運命の番だったりしてえ」

「早く胎内で暴れてえ」

「はぁ……はぁ……やめっ……」

腕もとられ舐められて活発になってしまった性器を見て僕は涙を流した。

「可愛い反応……萌える。涙も甘いとかΩって糖分でできてるのか？」

「なわけ、でもやべえ、俺も挿れたくなったわ」

「はぁ……はぁ……」ズクン……お腹の奥に欲しい。αのがほしい。違う。ダメだ。流されちゃ……。

「はい、お尻突き出してね、ぬるぬるだわ、指すんなり飲み込んでいくんだけどエロいな」

「うっ……んんああっやめっ」

「すんげーフェロモン、美味そう」

「はいはい、四つん這いになって、声抑えとけよ、橘にバレたら殺されるわ」

「ああ、ほら、俺の啜えて成長させてよ」

「んっ……」

性器が口内に入ってきた。なんで橘さんの名前が出てきたのか分からないが。

「いただきます」

はあ……はあ……、入っちゃう……入っちゃう……。

スパンと襖が開いた。

続きは本編にて！